

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第29号

平成28年8月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

懐良親王を奉じ、大宰府を制圧し、九州統一

九州南朝の雄、武時・武重・武光の菊池氏三代

正成が建武功労一番と評した武時

「菊池氏三代」(杉本尚雄著)によると、菊池氏は、菊池郡司でありながら一族が多く府官となり、9世紀中ごろから11世紀前半にかけて本宗が有力府官として活動し、中央政府にも出仕して、ついに対馬守を勝ち取るまでに発展したものである、と云う。

南北朝時代に登場する菊池武時は初代、菊池則隆より数えて12代目に当たる。

楠木正成が、建武の中興、功労一番は菊池武時と評価した武時は、元弘元年1333、楠木正成が千早籠城戦を戦っていた時、3月11日、菊池から博多に到着する。

そして、翌日鎮西探題に出仕するが、着到の遅参をなじられ、侍所と口論をする。その翌日、武時は少弐に、宣旨の使いとして使者を立て、「ともに鎮西探題討滅を！」と要請するが、少弐は、その使者を斬って捨てる。

翌3月13日、武時は九州鎮西探題を襲撃し、その子頼隆とともに討死するのである。

「ふるさとに今宵ばかりの命とも 知らでや人の我を待つらん」と歌い、武重を博多から肥後に帰した“袖ヶ浦の別れ”は、正成・正行、桜井の別れの3年前の事であった。

では、いったいなぜ、武時は九州の鎮西探題を襲ったのであろうか、背景を見ておこう。

一つには、武時の妹と二条道平(北朝四代の摂政・関白をつとめた二条良基の父)の間に生まれた女子が後醍醐帝の女御(栄子)であるという、後醍醐帝に連なる有力公家との姻戚関係にあったこと。

二つには、源平の兵乱で反平家に立つも、鎮定後は平家についたため、源平の乱終息後、鎌倉幕府源頼朝から領地を没収される(のちに返還される)など、菊池家の歩んだ歴史そのものに反幕府姿勢という背景が読み取れ

ること。加えて、承久の変(1221)では、菊池隆貞が京都大番役として上京中で、上皇方の親衛軍をつとめたことから、北条義時から、本領の一部を没収されるなど、菊池氏の領主的発展に幕府・鎮西探題との衝突は避けて通れなかったのではないかと推察される。

菊池千本槍を考案した武重

武時の後を継いだ子、武重は、建武新政権では肥後守に任じられ、武者所に列せられている。

建武2年1335、中先代の乱勃発を契機として足利尊氏が建武政府に反旗を翻すと、後醍醐帝は尊氏討伐軍を出京させるが、武重は新田義貞に従い、箱根竹の下の合戦で足利軍と戦う。

この戦いで、菊池軍は、小刀を青竹の先につけ、にわか作りの槍として、槍隊による槍ふすまを作って進撃し、足利直義の軍に勝つことができたといわれているが、武重の考案で、菊池千本槍のはじまりと伝わる。

そして、翌年2月、弟の武敏は、大宰府を攻撃して少弐貞経を討ち取るが、3月2日、多々良浜の戦いでは破れ、尊氏の大宰府入城を許してしまう。

尊氏が東上を開始すると、5月18日、武重は福山城で防戦するものの、京に逃げ帰ることになる。

そして、正成が散った湊川の戦いでは、菊池勢から物見として派遣された弟の武吉が、丁度、正成・正季討死の場面に遭遇し、ここで引き返すは武士にあるまじき行為と、この地で討死をしている。

正成が湊川に散り、新田義貞が京に戻ると、後醍醐帝は比叡山に難を避けるが、武重は後醍醐帝に随行し、脇屋義助の下、東坂本に布陣する。

そして、この年10月、後醍醐帝が尊氏の甘言に騙され



菊池武時画像 熊本県山鹿市・日輪寺蔵

て京に戻り、花山院に幽閉されるが、武重も後醍醐帝の還幸に従い囚禁される。

この後、後醍醐帝は吉野に逃れるが、武重は、囚禁を脱し、河内を経て、菊池に帰り、挙兵する。この後の恵良惟澄と呼応した武重の挙兵・軍事行動は、懐良親王による九州征西府構築に向けた大きな第一歩となる。

延元3年1338、武重が病死をすると、その弟、武士(たけひと)が菊池家の惣領となるが、軍事的才能や政治的手腕に欠け、弱い気性の武士は、興国5年1344、惣領を辞し、出家する。

楠正行が河内で南朝復権の戦いを黙々と続けていた頃、九州の南朝の主力勢力であった菊池一族は惣領権不安定という九州受難時代であったことが分かる。

そして、九州征西府の構築を目指して吉野を發った懐良親王もまた、四国から九州の薩摩谷山に入ったものの、大宰府を目指すには至らなかったのである。

筑後川の戦いで勝利した武光

武士の跡を継いで菊池の惣領となったのが、武重の弟、武光であった。

興国6年1345、3月、武光は恵良惟澄の支援を得て、深川城を回復すると、以後、同城を確保し、実力によって菊池氏の惣領となるとともに、懐良親王を菊池に迎え、九州統一に向けた快進撃を開始する。

征西府が九州を統一した背景として、懐良親王の政治的権能と武光の軍事的機能の連携がある。

正成・正行は後醍醐帝とのつながりでもあった盟友、護良親王を早くに亡くしてしまうが、菊池氏はその軍事的機能を背景に、懐良親王の政治的権能をいただいたことで、九州の官方結集を図ることができたのである。

また、楠氏、菊池氏に共に備わる経済力にも着目をしておかなければならない。

楠氏は、河内・金剛山の辰砂をはじめとする鉱産物やさまざまな手工業製品を扱い、陸運・水運を使った運輸流通によって財を成し、吉野の宮を支える経済力を手にする。そして、菊池氏は、海の支配、とりわけ倭寇の活躍によって莫大な財を成し、軍事力の基礎を築いた。

戦国時代、武士は一日一人一升の飯を食したという。何千、何万という武士をしつらえ、戦いに挑むとき、どれほどの財力が必要であったか、われわれの想像を絶する。もちろん、当時、飛行機もなければ、車もない時代。物資の移動はすべて、船と荷駄であったことを考えると、山城を巡る攻防にどれほどの労力と時間と財力が費やされたことか。

武光は、正平3年1348正月2日、薩摩谷山城を發った懐良親王を宇土港に迎え入れている。そして、1月14日に、懐良親王は菊池に入り、懐良親王の菊池在り時代の14年が始まる。

楠正行が、北畠親房の主戦論に抗しきれず、四條畷の戦いに赴き、討死する、まさに時を同じくして、九州で

は、菊池一族を中心に大宰府攻略・九州統一が現実のものとなりつつあった。

武光の時代に入ると、九州は、懐良親王の官方、足利幕府の探題方、そして足利直義が送り込んだ直冬の三分時代に突入する。

そして、正平14年1359、九州の官方による統一の先駆けとなる戦いが起こる。この年、7月15日、武光は、懐良親王とともに筑後川を渡り、少武軍と対陣する。

武光は、8月6日、夜襲を決行。少武軍は不意を突かれ混戦に陥り、激戦となるが、菊池軍の勝利で終わった。太平記によると、官方4万騎、死傷およそ三千、少武方6万騎、死傷2万1千とあり、九州第一の合戦といえる。

この戦いは大原合戦ともいわれているが、この地域には今も、大将塚・千人塚・五万騎塚など、戦死者を埋めたと伝わる塚が残っており、武光が血刀を洗ったことから大刀洗川の名も残っている。

懐良親王は、九州征西府の構築を目指して京の都を發って26年目の正平16年1361、悲願の大宰府入りを果たす。しかし、建徳2年1371、九州探題に今川了俊が赴任すると、状況は一変する。

文中元年1372、8月、今川了俊の攻撃を受け、大宰府は落城。武光は高良山に退くが、この年11月16日、戦傷がもとで死去する。

正行の不幸、菊池氏惣領権不安定時代に遭遇

武光死後、菊池家は武政(武光の子)、武朝(同、孫)と続くが、この武政・武朝時代は、今川了俊との壮絶な戦いの連続であった。

そして、正平21年1366、九州に入った良成親王の染土城が陥落、弘和3年1383、懐良親王の死去、元中3年1386、今川了俊による川尻、宇土の陥落と続く。

元中8年1391、南北朝の合一の前年に至り、最後の砦であった八代城が陥落するに及び、良成親王・名和彰興(名和長年の孫)は降伏、武朝は行方をくらましている。

しかし、南北朝の合一が成ると、武朝は今川了俊と交渉し、肥後守護職に就く。そして、菊池家はその後代々同職につくことになるのである。

帝に義を貫き、正成は建武の新政を、正行は吉野の宮を、それぞれ支え続け、国政に身を投じる一方、懐良親王の下、九州統一を目指した菊池氏は、一時は九州統一に成功し、最後、敗れはしたものの、両朝統一後も家門繁栄を勝ち取る。

九州、地方政治の舞台にとどまった菊池氏と、天下国家の舞台に身を投じた楠氏。政に対する関わり方の違いと、一族結末の差を感じざるを得ない。

そして、何よりも不幸は、正行にとって、菊池氏の惣領権不安定時代に遭遇したこと。菊池氏を含む征西府は、最後まで、京の都には入れなかった。(写真:中世武士選書「菊池武光」掲載“菊池武時画像”より転載)

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)